



## 先進校に学ぶキャリア教育の実践

# 新しい授業の形で学びを楽しく、 「やってみたいをやってみる」を可能に

### 開建高校(京都・市立)

自ら考え、自ら学ぶ「協創者」の育成を掲げて開校し、完成年度を迎えた開建高校。  
問いから始まる授業や、「やってみたいをやってみる」を可能とする学校生活のなかで、  
学びを楽しみ、自分の方向性を見いだす生徒が育っています。

#### こんな学校は必読！

- ✓ 生徒にとって楽しい授業を行いたい
- ✓ 生徒を学びに引き込む「問い」を設定したい
- ✓ 探究活動で、テーマ設定に課題感をもっている

取材・文／藤崎雅子

#### 自ら考え、自ら学ぶ 「協創者」の育成を目指して

開建高校は2023年、これからの社会に対応した新しい普通科系高校として誕生した。開設準備から携わってきた教頭宮越敬記先生はこう語る。

「原点にあったのは、生徒にとって授業が楽しくない学校にはしたくないという思いです。知識を受け取るだけ、やらされ感で学び続けるのではなく、授業以外にも含めて楽しみながら学べる学校づくりを目指してきました」

学校教育目標に掲げる人材像は、「自らが主体的に考え、探究し、多様な他者と協働することを楽しみ、未来社会を創造する人物」。これを「協創者」と名づけ、必要な資質・能力として、学び続ける力・対話力・協働力・思いやる心・貢献志・挑戦力の育成に力を入れている。

「まずは楽しみながら自分の好きなことを突き詰めていってほしい。そこから他者とも力を合わせた社会貢献へとつながっていくと考えています」(宮越先生)

楽しみながら自ら考え、自ら学ぶ協創者の育成のため、学びの三原則として「問いから始まる学び」「対話・協働での学び」「個に応じた学び」を設定(図1)。これに基づき独自の授業や探究を展開している。

#### 教員3人に生徒80人

#### 問いから始まる授業を試行錯誤

学びの三原則による授業実践を促す仕掛けのひとつが、普通教室4つ分の学習空

間「フーニングボッド」の設置。ホワイトボードの壁を動かして教室のレイアウトを自在に変更できるようにした(図2)。また、1クラスを80人とし、原則3人の教員で授業を行う多人数指導を導入した。これにより、教室レイアウトを自在に変化させながら、教員3人が等しい立場で進める授業、1人が中心に授業を進めて2人が支援に入る授業、2人でワークショップを行って1人が両空間をサポートする授業…など多様な授業が可能となった。

参考にはできる前例がなく、そのメリットを活かせるようになるまでには時間を要したが、実践の幅は着実に広がっている。例えば、3分割した授業の方法は、名簿順や習熟度だけでなく、「先生の説明を聞きたい人」「質問しながら自分で進めたい人」「自分のペースで進めたい人」など学び方で分け、生徒が選択する方式も編み出された。「旧来やっていたことが通用しないからこそ、授業者同士が対話して合意形成しながら組み立てることになります。そのなかで新しい提案が生まれ、思い切った挑戦につながり、少しずつ授業改善が進んできました」(宮越先生)

こうした環境の下、授業で目指すのは、「問いから始まる学び」。カギとなるのは、「思わず考えてしまふ問い」だ。「例えば『第一次世界大戦を経験した人々は、なぜ第二次世界大戦を止められなかったのか』という問いは、中学校までの学習や最近のニュースなどの知識を基に自ら考えを深め、探索しながら授業を受けていくことができる」と研究開発主任・村井昂介先生。一方、「江



## School Data

2023年設立／ルミネーション科  
生徒数709人(男子284人・女子425人)  
進路状況(1期生が卒業前のため実績なし)

## Outline

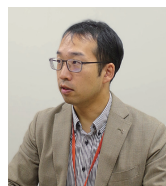
塔南高校を前身とし、新しい普通科系高校として開校。「光(Lumin)」と「革新(Innovation)」を組み合わせたルミネーション科を設置し、「協創者」の育成を目指している。新しい形態の授業の実践、京都をフィールドにした探究活動、課外での多彩なプロジェクト活動が特徴。文部科学省「新時代に対応した高等学校改革推進事業(令和4～6年度)」および「高等学校DX加速化推進事業(令和6～7年度)」の指定校。



1学年主任  
佐藤隼平先生



3学年主任  
松田賢太朗先生



研究開発主任  
村井昂介先生



教頭  
宮越敬記先生

図1 開建高校が目指す学び

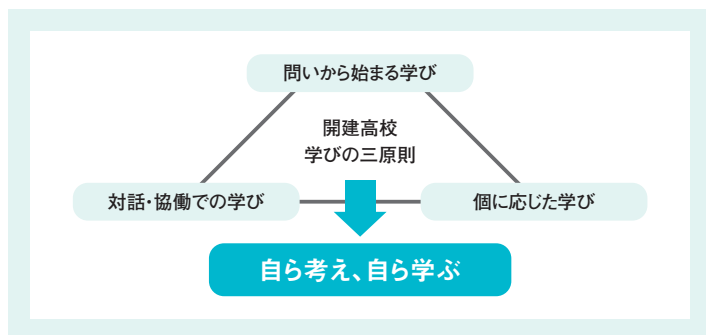


図2 ラーニングボットのイメージ図



戸時代に形成された外交関係はどんなものか」のような問いは、「探究しがいのある問いだが、自分ごととして考えるための前提知識が不足している生徒を惹きつける面白さは足りない」と指摘する。これまで教員間で授業を見合い、対話やワークを行う研修を繰り返し実施。生徒の思考を駆動させる優れた問いには、「身近で自分ごととして考えやすいこと」「難しいが、何らかの方策が複数頭に浮かぶレベルの難易度であること」「多様な答えが可能など問いの答えが気になること」といった特徴を見いだしたという。そのような授業改善のなかで生徒が楽しく学ぶ姿も見られる。古典の松田賢太朗先生はこう話す。

「古典の面白いところを熱く語ってくれたら、授業後、その日に取り上げた作品について生徒同士で感想を言い合っていたり…学んだことが授業外でも生徒の頭に残ってくれている様子が、教師としては非常に嬉しいですね」

**比べてみる、まねしてみる…  
人生に役立つスキルを育成**

同校では、自ら考え学ぶ基盤となる方を略を「開建コアスキル」として設定し、これからの人生のさまざまな場面で使えるよう育成を図っている。コアスキルは探究のプロセスに即した「探索」「分析」「解釈」「表現」の4つに大別され、「比べてみる」「さか

のぼつてみる」など全16種類。イラスト入りのカードにし、生徒全員に配布している。

まずは1学年の学校設定科目「ルミネーション」で、コアスキルを使う練習をする。例えば「作ったカラーがおいしくなかった時にどうするか」を問いとするグループワークでは、「さかのぼつてみる」を使って「あのとき水を入れたすぎたのではないか」「芋を大きく切りすぎたのではないか」と思考を深めるなど、コアスキルを使った探索を経験する。また、哲学対話や絵画鑑賞を通じて、コアスキルを使った対話から新たな気づきを得る感覚を養う。

また、各教科の授業や探究活動でも意識的にコアスキルを活用する。例えば、歴史の出来事を理解するために「さかのぼつてみる」を使って背景を考察する、体育では先生の動きを「まねしてみる」から始めるなどだ。

「次第に生徒はコアスキルを覚えて共通言語となり、カードなしでも活用を促すことができるようになります」(村井先生)

**自分のパースペクティブを自覚し  
意識しながら探究に取り組む**

生徒の学びを主体的な行動につなげるため、同校は「やってみたいをやってみる」をキャッチフレーズに掲げている。その実践の中核となる「総合的な探究の時間・協創」の流れを見ていこう(図3)。

目指すのは生徒の「やってみたい」から始まる探究だが、「1年生がいきなり質の高い探究を可能にするテーマを設定することは非常に難しい」と村井先生。責任の移行



例えば属性「探索」のコアスキルは「何かを変えてみる」「言葉を探してみる」「じっくり見てみる」「形にしてみる」の4つ。16枚のカードにし、表面にはコアスキルの説明、裏面にはこのコアスキルを使う場面を例示している。

モデルという教育理論に基づいて、1学年は教員がリードして「まずは、やってみる」というチュートリアル期間としている。

1学年前期の主要な活動である「協創パースペクティブ」は、問いが生まれる前段階にある、対象を見る際のフィルターのような視点をパースペクティブと呼び、これを自覚し意識的に扱えるようにするためのプログラムだ。共通のキーワード(例…コンビニ)をさまざまな教科・科目のパースペクティブで分析するリレー講義や、共通の新聞記事を各自が選んだパースペクティブで捉え直し調査や対話を通じて課題解決を考える活動などに取り組む。「そのなかで、生徒は物事を多角的に見る大切さや、自分に合うパースペクティブを自覚していきます」と村井先生は話す。

これと並行して、さまざまな物事を計測し、そのデータから課題設定につなげる練習を行う、龍谷大学との共同開発プログラム「開建ショートリサーチ」も実施する。1学年後期は「京都探究」と題し、連携する企業・団体等の企業理念等をテーマ設定の素材として活用した探究に取り組む。例えば「京都市役所歩くまち京都推進室の「人と公共交通優先の歩いて楽しいまちを実現したい」という思いを素材とし、生徒は「点在する商店街をつなぐ」ことをテーマにフィールドワークや企業との対話を行った。

### 生徒それぞれの やってみるをやってみる

2学年以降の「協創」では、いよいよ生徒自身の「やってみる」からのテーマ設定を

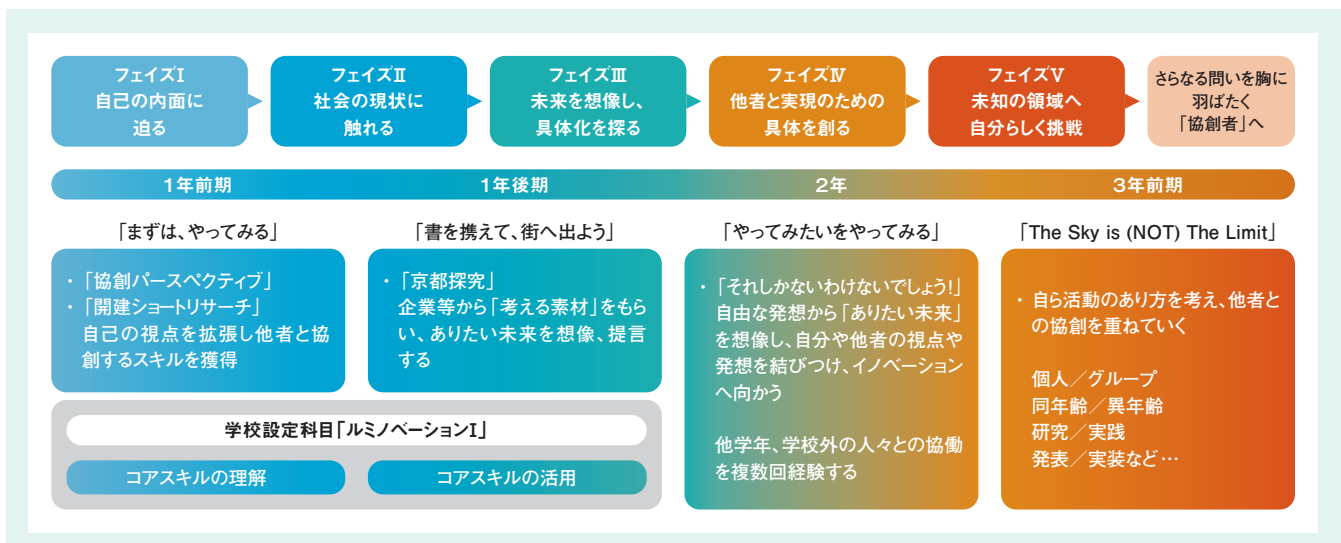
行う。既に社会課題として広く認識されているものではなく、生徒の独自の発想を引き出すため、最初は「○○○しかないわけではないでしょう! □□だってあるじゃない!」というフレームを活用する。例えば、「フランス料理は高くて食べられない、しかないわけじゃないでしょう! もっと早く、もっと安く、一般的に家庭でも食べられるような世界だってあるじゃない!」という問いから探究を始めるという具合だ。

後期からはそうしたフレームは指定せず、各自でテーマ設定を行い、グループまたは個人で企業団体等と連携しながら自由度の高い活動を行う。その際、生徒は6つのラボに所属する。ラボは課題の分野別ではなく、「みつめる」「ふかめる」「うたがう」「みなおす」「たくらむ」「うみだす」という進め方・方向性で分かれる。例えば「ふかめる」ラボには既知のことを深めたり曖昧なことを明確化することが大事な探究、「うみだす」ラボには新しいアイデアを形にしたり新たな仕組みを作る探究に取り組む生徒が集まる。このラボを拠点とし、切磋琢磨してアップローチを洗練させながら探究を進めていく。後期の活動では、一斉の発表会は設けず、生徒自身でその探究活動にとってベストなタイミングを「ヤマ場」として設定し、その分野に詳しい人や関係者にプレゼンテーションを行い、評価を得ている。

生徒の自由度を徐々に高めていくが、それは「放任」とは異なる。

「放っておくと、生徒は早い段階で満足しがちです。教員が生徒の意欲に火をつける、いわばジェネレーターとなり、活動をもう

図3 「総合的な探究の時間・協創」の流れ



「協創パースペクティブ」ではコンビニを共通ワードに各科目のリレー講義を実施。数学ではコンビニの立地を図形的にモデル化し配送経路の最短化を検討、歴史ではコンビニ開店時期から地域の発展の歴史を考察するなど。



地域の方にプレゼンテーションを行う「ヤマ場」の様子。探究活動の過程や結果・成果、ここからの展望など、取組全体について評価を受ける。



New HORIZON Dayで実施された餅つき大会。軽い気持ちで始めた生徒たちは、さまざまな準備や交渉が必要なことにやりながら気づいたが、諦めずに取り組み大盛況となった。

一段階深めたいと思わせるよう声掛けすることが大切です」(村井先生)

そのためには生徒をつぶさに観察することが必要だ。1学年主任の佐藤隼平先生はこう話す。

「思考をフル回転させて生徒の状態を観察しています。動きが止まっている生徒がいたら、考えているだけか、困って動けないのかを見極めたうえで、必要な声掛けをするよう心掛けています」

そのなかで生徒は、複数の探究を同時に行ったり、1サイクル終えて別の探究を始めたり、縦横無尽に探究活動を繰り返す。現在3年生には、プラスチックで服を作ったり、古代エジプトの一般人の暮らしを説明しようとしたりと、ユニークな探究が目立つ。[間]に合わせてではなく、自分の内面から生まれた探究に取り組んでいる」と村井先生は言う。

やってみたいをやってみる機会が「協創」以外にもあり、その代表例が、生徒が立てた企画を実施する「New HORIZON Day」だ。年数回、放課後に部活動も原則停止して開催し、昨年度は各回平均10件程度の生徒企画が実施された。各種スポーツ大会やクイズショー、楽器演奏会のほか、地域の大人や子どもを巻き込んで100人近くを集めて餅つき大会を開くなど、さまざまな企画に多くの生徒や教員が参加して盛り上がる。

「年々、生徒の企画数が増えるだけでなく、内容も多彩になってきています。『こんなこともやっていいのだ』と感じることでハードルが下がり、気軽に挑戦してみようという

## Interview

### 挑戦力が身についた

いろいろな課外活動に参加し、ほかの高校ではできない経験ができています。特に印象深いのは、3年間続けた祭り実行委員会です。文化祭や体育祭の企画・運営に携わり、3年生では中心メンバーとして新企画を立ち上げたこともあります。先生方との意見の違いを調整するために何度も話し合いを重ね、物事を決める難しさや対話の大切さを学びました。

私は中学生までは積極的なタイプではありませんでした。でも、課外活動に一度挑戦してみたらとても楽しく、「前にできたのだから次もやってみよう」と何度もやってみることで、「挑戦力」が身についたと思います。おにぎりの商品開発をするプロジェクトや国際交流などの経験が基で、将来は海外向けの商品企画や展開に関わる仕事をしてみたいと考えています。

(3年生・山崎璃子さん)

### やりたいことを見つけ、将来像も明確に

開建高校の「やってみたいことをやってみる」という理念に惹かれて入学しました。1年生のころは自分のやりたいことがわからなかったけれど、「協創」の活動のなかで「地域のことにはすごく意欲が湧く」と自覚するように。まだ知られていない京都の魅力を伝えたいという思いで、京都をテーマにしたクイズを作って校内外で大会を開くなどして発信してきました。最初は難題すぎてお客さんを困らせることもありましたが、次第に相手に合わせた出題ができるようになり、今は楽しみにしてくれている常連さんもいます。以前の自分は一つの捉え方を「これしかない」と思いがちでしたが、活動のなかでさまざまな方の考え方がインプットされ、視野が広がったように思います。将来は活動の延長線上で、地方公務員やNPOなどの職に就き、地域の人も観光客も安心して過ごせる京都をつくっていききたいです。(3年生・北野湧成さん)



### 探究のテーマと進路が二体化していく

いう雰囲気広がっているのではないのでしょうか」(佐藤先生)

開校3年目を迎え、着実に新しい学びの実践が進化し、生徒がやってみたいことに挑戦する機運が高まるなか、多様な生徒の成長が見られるという。

「目立つタイプではなくても、じっくり一つの課題に向き合い続けるなかで、地域の大人や他校の生徒と対話を通じて共感を広げ、必要な場面ではとことん前に出ていける生徒が育っています」(村井先生)

また、今、進路選択の時期を迎えた1期生には、やってみたいことを起点として取り組んできた活動と、進路の角が一体化していく例が目立つという。例えば、ある生徒は京都の魅力を自作のクイズで伝える活動のなかで、京都の安心・安全

を守る仕事に就くという目標をもつようになった」(Interview参照)。地域の特産品を用いたおにぎりを開発するプロジェクトに参加した生徒は、農家から食材の提供を受けたことをきっかけに農業に興味をもち、校庭の一部を開拓して農場を作り、野菜を育て始めた。その延長線上に進路を考え、農場をもつ大学への進学を目指している。

「いろんなものに興味関心をもち、実際にやってみることから一つの方向性を見だし、進路先で深めていこうとする。そんな成長の姿が見られるのは本校ならではのと思います」(佐藤先生)

協創者の育成に向けた同校の挑戦は、まだ始まったばかりだ。

「生徒のやってみる精神には、まだ伸びしろがあります。もっと失敗を恐れず挑戦し、これは違うと思ったら迷わず手放しながら、自分に合うものを見つけていって

ほしい」(佐藤先生)

「内輪で満足せず、野心的な活動を促していきたい。また、生徒が自分たちで学校をつくっていくという意識を高め、生徒の自治を進めていきたい」(村井先生)

軌道に乗り始めたさまざまな実践を有機的に結びつけ、生徒の成長を加速させていくことへの意気込みも聞かれる。

「生徒は『やってみたい』という良い種をたくさんもっています。それを実行するには教科の力も少なからず必要です。実際にやってみて、うまくいかない経験をしないと気づきにくいものですが、早期に気づけるような仕組みを作ることが目下の課題です。心からやりたいというエネルギーを、楽しく学ぶ基となる意欲につなげていきたいですね」(宮越先生)

従来の枠組みにとらわれない同校の実践は、今後も学校現場に多くの示唆を与え続けそうだ。